

研究活動の更なる推進を －奈良学園大学紀要のスタートに寄せて－

学長 梶田 叡一

大学の名称変更に伴い、新たに奈良学園大学紀要がスタートすることになった。嬉しいことに、この第1集には執筆希望者が予定より大幅に多く、かなり多くの方に次号への執筆に廻っていただいた。本学の教員諸氏の研究活動が盛り上がっていることに敬意を表すると共に、本学の研究が隆盛である状況を互いに喜び合いたいと思う。

大学は改めて言うまでもなく、何よりもまず教育の場である。しかしながら、小中学校や高等学校における教育と、いささか趣を異にしている面がある。大学教育では、例え同一の科目名の講義であったとしても、講義者自身の考え方に基づいて、内容そのものも、またその深浅も異なったものになる。これは、大学教育の内容が高度な専門性を持ち、個々の大学教員が背後に持つ研究の蓄積が異なる、ということから生じる相違と言ってもいい。小中学校や高等学校では、教育者の個人的相違が出ないように学習指導要領が定められ、検定教科書が用いられるわけであるが、大学教育に関してはそうした縛りは無い。だからこそ、個々の大学教員の責任は非常に重いものとなる。日常的に研究活動をやっていないと、学生に対する教育指導が、本筋からずれたものになったり、薄っぺらなものになったりしてしまうのである。

大学はまた、研究の場である。学生に教育指導する内容・水準を大きく超えて、個々の大学教員は、研究者として、自分の研究テーマについての研究活動を展開するのが、大学という場の伝統的な姿である。こうした研究の場としての大学が、総体としてうまく機能していないならば、その国の学問や研究の水準が維持され向上する、ということも望めない。したがって研究は大学人にとっての責務であると同時に、個々の大学にとっても、その社会的な存在意義を問われる重要な責務の一つである。だからこそ、研究活動をやらない人は、アカデミックス（大学教員）として認められることはない。大学教員としての採用や昇進に際して研究業績が最も重視されるのも、またこのためであると言ってよい。

こうした研究活動の成果は、当然の事ながら、全国の、更には全世界の、同学の方々との交流の中で、磨かれていかなければならない。こうした研究交流が今後とも一層盛んになっていって欲しいと願うが、本学の紀要も、このための有効な手段として機能していくことを強く期待したい。

奈良学園大学紀要の新たなスタートに際し、私自身もまた本学の教員諸氏と共に、自分自身の満足できる研究成果を挙げることができるよう意欲を新たにしていきたいと思う。